

<自由投稿：原著論文>

## 初等音楽科教育法におけるフジコ・ヘミングの教材としての有効性

茨城大学教育学部

山口（藤田）文子

### Effectiveness in teaching methodology for primary school music as teaching materials of FUJIKO HEMMING

Ayako YAMAGUCHI (FUJITA)

キーワード：音楽化教育、鑑賞教材、音楽療法、平成20年告示学習指導要領

Key words : School music education, materials of appreciation, music therapy, the new course of study

#### 概要

本研究は、大学の小学校教員養成課程における、初等音楽科教育法の授業の充実のため、音楽科教育の立場からフジコ・ヘミングを対象にとりあげ、鑑賞教材、音楽療法等といった視点から考察することを目的とする。その際学生たちの生の声を手がかりに、平成20年告示学習指導要領などに焦点を当て、その教材性に迫ることとする。

#### はじめに

筆者は小学校音楽科に関連する音楽科教育の授業を担当している。その中で学生の興味・関心を重要視しながらも、音楽科教育の視点から価値のある授業を成立させることを主眼に模索を続けている。こういったいとなみの中で、鑑賞教材、音楽療法など様々な視点を軸に展開が期待でき、なおかつ学生の興味・関心をとらえる存在として、フジコ・ヘミングの存在は欠かすことができない。今回はフジコの存在を確認したうえで、これまでの教材としてのあり方を基盤にすえながら、今後の展望の可能性を探ることとしたい。

その際学生たちの生の声を反映させつつ、学習指導要領改訂の流れの中で、平成20年告示の学習指導要領（以下新学習指導要領と記載する）も射程に入れながら作業を進めることとする。

なお、フジコは新聞、テレビ等で大きく取り上げられているにも関わらず、音楽科教育の教材として扱われ、さらにその有効性にまで踏み込んだ研究はこれまで十分になされてこなかった。

フジコについてであるが、1999年にNHKの特集番組で取り上げられたことをきっかけに、マスコミで大きく取り上げられるようになった<sup>1)</sup>。それ以来クラシック界で異例の売り上げを示し、依然人気のフジコである（彼女の履歴については、註を参考されたい<sup>2)</sup>）。音楽関連での活躍は言うに及ばず、エッセイ、画集、画集と音楽のコラボ、TV、映画等における様々な形（インタビュー、ドキュメンタリー、彼女自身を主人公にした番組の作成を含む）での出演など枚挙にいとまがない。

## 1. 鑑賞教材としての視点について

註で示したように多方面で活躍のフジコであるが、彼女の鑑賞教材としての視点をさぐってみよう。ここでは 1.1. 小学校における新学習指導要領の観点から、1.2. 新学習指導要領の指摘を踏まえ、フジコ自身のピアノ研究の立場からという二つの観点からさぐることにする。

### 1.1. 小学校における新学習指導要領の観点から

まず新学習指導要領の鑑賞に関して筆者なりの解釈を示し、そのうえでなぜフジコを取り上げたのかを示すことにする。

#### 1.1.1 新学習指導要領について

鑑賞の授業に関して、新学習指導要領と平成 10 年告示の学習指導要領（以下平成 10 年版と記載する）とを比較すると、新学習指導要領は基本的には平成 10 年版の流れを踏襲しつつも、我が国の音楽を各学年とも取り扱うなど、我が国の音楽の充実とともに、言語活動の充実が強調されている。

この言語活動の充実に関しては、「各学年とも感じ取ったことを言葉で表すなどの活動を位置づけ、楽曲や演奏の楽しさに気付いたり、楽曲の特徴や演奏のよさに気が付いたり理解したりする能力が高まるよう改善を図った。これは、受動的になりがちであった鑑賞の活動を、児童の能動的で創造的な鑑賞の活動になるように改善することを意図したものである。」<sup>3)</sup>と示されている。

ここに示された言語活動の意味を敷衍すれば、こういった活動をすることで、児童の内面に直接働きかけ、自己自身で考え、考えをまとめ、表現する力を発揮することができると想定したためであろう。筆者は「言葉で表すことは思考することである」逆を言えば「思考することは言葉で表すことに他ならない」と言い換えてもよいと考えている。

そして筆者はとりわけ「書く」という活動に注目する者である。「書く」という活動はすなわち「思考すること」ととらえている。「思考すること」すなわち「書くこと」と置き換えてもよいのではないであろうか。

筆者は、こういった「書く」、「表現する」、「他者と討論する」などといった総合的な言語活動により、「楽曲や演奏の楽しさに気付いたり、楽曲の特徴や演奏のよさに気が付いたり理解したりする能力が高まり、結果として「能動的で創造的な鑑賞の活動になる」と考えている。

また新学習指導要領の告示に先立って示された平成 20 年 1 月の中央教育審議会の答申の、「音楽を特徴付けている要素や音楽の仕組みを聴きとる力を育て、それによって音楽の面白さやよさ、美しさを感じ取ることができるようにする。さらに、鑑賞領域と表現領域の指導内容との関連が明確になるようにする」<sup>4)</sup>という文言も忘れてはなるまい。

筆者はこういった点に関して、音楽教育を専攻していない、特にクラシックの領域の音楽に接することの少ない学生（対象のクラスのアンケートによると、調査時 30 名中 1 名以外は全員クラシックの領域の音楽に接することが少ないと答えている）のためには、フジコの持つ音楽力、メッセージ性は十分にインパクトを与えることができ、学生自身が音楽に対して言語活動をすることでより深い教育力を発揮することができるのではないかと予想した。その際フジコの持つ音楽的な価値観も考慮に入れた。

### 1.1.2. フジコのドキュメンタリーのDVDの鑑賞について

今回はまずフジコの爆発的なヒットの源泉となった、NHKのフジコ自身の半生や現在の生活、演奏の様子を如実に示したドキュメンタリーのDVDを教材として取り上げ、学生の記述式のアンケートを通してフジコの陶冶力の実像にせまることとした。以下、授業、対象、教材、授業環境、アンケートの概要等を示し、匿名での公開の了承をもとに示された学生の生の声を限られた分量であるが示すこととする。

本授業においては学生へのアンケートという形をとってはいるが、授業者の立場から言えば貴重な言語活動を目的としている。また言語活動による学生の記述が、個人のみで完結するものでなく、他の学生同士と共有しそれぞれ新たな視点からの聴き方を得られるよう、アンケートの前に教師と学生、学生間で十分な意見交換の時間を持った。

授業・・・・・・・・小学校音楽科の教育法の授業。3回目（一回90分）。

対象・・・・・・・・小学校音楽科の教育法の授業を必修として履修しているM大学の学生28名。

教材・・・・・・・・DVD『フジコ～あるピアニストの軌跡～』<sup>1)</sup>の前半部分。45分。

教材について・・・・・・・・ドキュメンタリー形式でフジコの日常生活を紹介している。彼女自身による豊富なピアノ演奏を含み、絵画作成や、ネコ、日々のピアノの練習などとともに、フジコ自身が自分の生い立ち、人生について語っている。彼女はグスタフ・マーラーなどがリアルタイムで接したであろうウィーンのアンティークの椅子、彼女の母親が当時ドイツから持ち帰ったピアノなども紹介している。ヨーロッパの香り高い下北沢の自宅の雰囲気画面から流れ、師事したレオニード・クロイツァーなどの説明がテロップで示される。特にバーンスタインについては、彼女自身の口を通して、彼女の音楽を交えて赤裸々に語られている。母親との確執、聴覚を失うという事態に遭遇するも、それらを乗り越え、音楽の本質にせまる彼女の姿が描かれる。授業では実際にNHKで放映した、奏楽堂での演奏会の様子までを取り扱った。

授業環境・・・・・・・・適正残響の、合唱、独唱等の演奏会のホールとしても使用可能な階段教室。スクリーン使用。暗幕使用。鑑賞用オーディオ機器使用（充実した音響であった）。112名収容可能。

アンケート・・・・・・・・フジコについては、授業の流れの中で、弾き歌い（範唱・範奏研究の一環。模擬授業という形態で行っている。弾き歌いを取り入れることはあらかじめシラバスに示してある。）、鑑賞関連の対象としてとりいれることを、必要十分な情報とともにあらかじめ学生のレディネスを確認の上、示した。そのうえで、教員は教材を学生とともに鑑賞し、学生同士、もしくは学生と教員間の十分な意見交換のあと「何か気づいたことがあったら書いてください」という言葉かけをし、用紙を配った。授業の最後であり、このアンケートを書き終わった学生から教室を出ることとした。

以下、学生のアンケート結果の主なものを一部ではあるが示すこととする（学生のアンケートには、便宜的に通し番号を付けることとする）。

- ① 単純に聴いて、フジコさんという色がそのままピアノへのりうつっていたように聴こえた。
- ② フジコさんのピアノ演奏はとても心にしみわたってきて、引きこまれました。もっといろいろな曲を聴いてみたいと思いました。
- ③ このDVDをみれて（原文のまま）、よかったです。もっと、音楽について、フジコ・ヘミングについて知りたくなりました。ラ・カンパネラをもっとききたくなりました。
- ④ フジコさんの過去、環境などを含めて、自分という存在を確立しているように感じた。
- ⑤ フジコさんの母が、フジコさんへ、音楽（ピアノ）というものを教えたことが、教育という点から、大きな影響であると強く感じた。
- ⑥ フジコさんにとって、「ピアノ」という存在が人生そのものであると強く感じた。
- ⑦ ピアノが上手な人の弾くところを見るといつも「自分も頑張ってピアノを上手に弾けるようになろう」と思っていた。フジコのピアノを聴いてさらにその想いが強くなった。自分の中でそれほどフジコのピアノはすばらしいんだ（原文のまま）と感覚的に感じた。

そして、フジコの一言一言にも、頭の中に残るような言葉がたくさんあった。さまざまな困難をのりこえてさらにピアノを練習していくのはかなり大変なことだと思う。その中で、精神面をしっかりと保ちながら自分のスタイルをくずさないピアノを弾くのはかなり見習う面があった。自分もしっかりとしたピアノを弾けるように頑張りたい。

以上、特に、①、④で読み取れるように新学習指導要領に示された「楽曲や演奏の楽しさに気付いたり、楽曲の特徴や演奏のよさに気が付いたり理解したりする能力が高まり、結果として②、③、⑤、⑥、⑦に示されているように「能動的で創造的な鑑賞の活動にな」っていることがわかる。特に興味・関心が高まり、ピアノへの学習意欲が増していること、全くピアノを習ったことのない学生が調査時では30人中7人であったが、ほとんど全員に違和感、苦手意識が感じられないなど教育効果が感じられた。

## 1.2. フジコ自身のピアノ演奏研究の立場から

ここでは、新学習指導要領の指摘を踏まえ、さらにフジコの演奏そのものを取り上げ、鑑賞教材としての可能性をさぐってみよう。

すでに述べた平成20年1月の中央教育審議会の答申の、「音楽を特徴付けている要素や音楽の仕組みを聴きとる力を育て、それによって音楽の面白さやよさ、美しさを感じ取ることができるようにする。」<sup>4)</sup>といったアプローチは可能にならないであろうか。

また新学習指導要領の第1学年及び第2学年のB鑑賞(1)鑑賞の活動を通して、次の事項を指導する。  
 ア 楽曲の気分を感じ取って聴くこと。イ 音楽を形づくっている要素のかかわり合いを感じ取って聴くこと。ウ 楽曲を聴いて想像したことや感じ取ったことを言葉で表すなどして、楽曲や演奏の楽しさに気付くこと。また(2)鑑賞教材は次に示すものを取り扱う。として示された ア 我が国及び諸外国のわらべうたや遊びうた、行進曲や踊りの音楽など身体反応の快さを感じ取りやすい音楽、日常生活に関連して情景を思い浮かべやすい楽曲 イ 音楽を形づくっている要素の働きを感じ取りやすく、親しみやすい楽曲 ウ 楽器の音色や人の声の特徴を感じ取りやすく親しみやすい、いろいろな演奏形態による楽曲<sup>5)</sup>、という文言に

合致する学びが成立するためにはどのような教材が適切であろうか。

筆者は、フジコの演奏そのものに完結するあり方も大きな教育的な効果を期待できると考えるが、ここではむしろ、他者との比較を通してこういった教育効果を得られないかと考えた。

ショパン作曲の「子犬のワルツ」をフジコの録音<sup>7)</sup>と、神業といわれた今は亡きロシア連邦の伝説的なピアニスト、ソフロニツキーの貴重なピアノ録音<sup>6)</sup>の双方でとりあげ、比較することでこういった文言に示された学習のねらいを達成しようと考えた。

以下、授業、対象、教材、授業環境、アンケートの概要等を示し、同じく匿名での公開の了承をもとに示された学生の声を示すこととする。なお、授業環境やアンケートの採取方法は 1.1.2. と同じである。

授業・・・・・・・・小学校音楽科の教育法の授業。4 回目 (1.1.2. の次の時間)。

対象・・・・・・・・小学校音楽科の教育法の授業を必修として履修している M 大学の学生 27 名 (1.1.2. と同じ対象)。

教材・・・・・・・・ソフロニツキー録音の CD 「子犬のワルツ」<sup>6)</sup> 2 分 4 秒。

フジコ録音の CD 「子犬のワルツ」2 分<sup>7)</sup>。

教材について・・・・・・・・「子犬のワルツ」変二長調作品 64 の 1。

1846 年から 47 年の作曲。フレデリック・ショパン (1810-1849) と同棲生活をしてきた小説家ジョルジュ・サンドの飼っていた愛犬が、自分の尻尾を追ってくるくると走り回る様子を音楽で描写したものという通説がある。・・・・・・・・この曲は屈託のない軽やかな曲調であるが、作曲当時のショパンはますます病状が悪化し、サンドとも不和となる直前で、死の影は間近に忍び寄ってきていたとされている<sup>8)</sup>。

フジコはフジコ自身の言葉によれば、音に色を塗るように弾くという表現をしている場面がある<sup>1)</sup>。一方でソフロニツキーは、音色の均一性、速いパッセージにおける確実なテクニックと的確な表現力といった点で極めて高い評価の持ち主である<sup>9)</sup>。

挙手によるアンケートでは、学生達は結局フジコとソフロニツキーではほとんど全員フジコの方が好ましいとのことであった。その理由として様々な点が指摘された。前述でもわかるように、1.1.2. 同様言語活動による学生の記述が、個人のみで完結するものでなく、他の学生同士と共有しそれぞれ新たな視点からの聴き方を得られるよう、事前に教師と学生、学生間で十分な意見交換の時間を持ち、アンケートを行った。

以下、学生のアンケートから主だったものを示すこととしよう。この点に関しては明らかに 2. 音楽療法の視点について—メッセージ性を中心に—と関連するが、特に 1.2 で最初に取り扱った文言に関連して示すこととしよう。

- ⑧ ソフロニツキーは、激しく、力強く弾いている感じがした。技術を最大に出している感じだった。フジコは、優しい音色で、明るく楽しく聴けた。ふたりとも上手いと感じたけど、「聴いてもらう」ということを考えると、フジコの方がいい音色だなと思った。
- ⑨ ソフロニツキーの特徴として・波がある。・細かいタッチが一つ一つ強く感じた。しかし、一つの音の

重さまで感じなかった。・強弱の差を感じた。・テンポが速め、が簡条書きの形で示されている。フジコの特徴として・最初一音目が優しい。・なめらかさを感じた。・一つの音に重さを感じさせるように聴こえた。・メロディーに対する背景を思い浮かべやすかった。・ソフロニツキーよりも強弱を感じなかった、が簡条書きの形で示されている。

- ⑩ ソフロニツキーの子犬のワルツは、聴きなれた普通の子犬のワルツだった。フジコの方は、やっぱり独特な世界をもってるな（原文のまま）と思った。一つ一つの音が速いのになすごくキレイ（原文のまま）な音にきこえた。ところどころゆっくりになったりはよくなったり、音の強弱も感じられた。
- ⑪ 同じ曲なのに結構ちがいがはっきりしていた。どこで強くするか、どこで弱くするかで曲の勢いも変わってふんいきが全然ちがう曲になっていた。曲の速さや強弱すべてで曲が作られていた。その曲を、どのように弾きたくて、どのように弾くかがどれだけ大事か気づけました。フジコさんの曲は曲のなみがすごかった。
- ⑫ フジコさんのピアノの方が優しくてあたたかい感じがしました。子犬が楽しく遊んでじゃれている感じがしたのがフジコさんで、ソフロニツキーさんの子犬のワルツは犬がすごい速さで走りまわっている感じがした。少しかたい感じがしました。

ここで特に平成20年1月の中央教育審議会の答申の、「音楽を特徴付けている要素や音楽の仕組みを聴きとる力を育て、それによって音楽の面白さやよさ、美しさを感じ取ることができるようにする。」<sup>4)</sup> という観点に注目すると、⑨、⑩、⑪は特に前半の「音楽を特徴付けている要素や音楽の仕組みを聴きとる力を育て」という文言に合致し、⑫は後半「それによって音楽の面白さやよさ、美しさを感じ取ることができるようにする。」を想定できるであろう。⑧はこれらの観点すべてにあてはまると考えられる。

こういった立場を敷衍し、さらに別な角度の学習を希望するならば、フジコのショパン作曲「舟歌」の演奏<sup>10)</sup>と、フジコのピアノの師である、レオニード・クロイツァーの「舟歌」の演奏<sup>11)</sup>、同じくクロイツァーの弟子で夫人の豊子・クロイツァーの「舟歌」の演奏<sup>12)</sup>を比較するなど、様々なアプローチが考えられる。

以下はあくまで筆者の考えであるが、筆者が聴取後気づいたことを示そう。

前述の3人を比較すれば、彼ら（フジコ、レオニード・クロイツァー、豊子・クロイツァー）の演奏はかつてレオニード・クロイツァーが述べたように、「彼（ショパンのこと・・・筆者による）は世界をその純粋な天性を通して眺めた。ベートーヴェン的な自然主義はショパンにおいては貴族的な気風をもって打ち消されている。あらゆる激情は制御され快い響きの内に包みこまれてしまう。そして彼の愛する祖国の素朴な農民さえ、荒々しい長靴ではなく夜会靴をはいてマズルカを踊っているし、ポロネーズにしても贅を凝らした大広間を練る貴族たちの行列となっている。それゆえに彼の音楽は何かしら究極的な真実さが欠けているのである。しかし彼の極度に統御された音響感が、この内部の空虚なところをほとんどおおい隠している。僅かばかりの断片的な駄作と後期のかなりの作品に見られる低迷とを除いては、彼は常に心の映像に対してそれにふさわしい表現形式を与えている。」<sup>13)</sup> という表現の延長上にあることがわかる。

しかしながら、フジコは絵画的表現という、その強烈な個性をもって、またレオニード・クロイツァーは彼の壮大で深遠な音楽観をもって、豊子・クロイツァーはその繊細で、華麗、かつ女性的な魅力をもってアイデンティティを主張して譲らないように感じられる。

筆者はこういった演奏に触れるとき、鑑賞の醍醐味・豊かさを感じ、音楽に対して深い畏敬の念を禁じえない者である。

前述したように、上記のような受け止め方はあくまで筆者の立場からのものにすぎない。しかしながら小学校音楽科の中にあっても、段階を踏んだ授業計画を想定すれば、様々な形で学びが成立するのではないかと筆者は考えている。学生にとって鑑賞の授業に要求される音楽史等の知識的な理解、ピアノそのもの・演奏技法を含むピアニスティックな理解、教材そのものの持つ音楽的な要素等々、学ぶものは計り知れないほど多いからである。いわんや大学における音楽の専門教育、もしくは大学における音楽教育を専門とする教科教育の授業においてをや、である。

## 2. 音楽療法の視点について—メッセージ性を中心に—

ここまでの学生たちのアンケートの結果、また授業中の反応をみると、1.2. フジコ自身のピアノ演奏研究の立場からで少々ふれた様に、多くの学生たちは、フジコのピアノには人を癒す要素があるという。本論文では、音楽療法を「音楽の諸側面を利用して心身の癒しを与える方法」と仮に定義することとする<sup>14)</sup>。こういったフジコの音楽の持つ音楽療法の視点を、学生とともに、以前のテレビ番組であるが『知ってるつもり』<sup>15)</sup>の録音聴取を手がかりに考えてみた。

以下、授業、対象、教材、授業環境、アンケートの概要等を示し、同じく匿名での公開の了承をもとに示された学生の声を示すこととする。なお、授業環境やアンケートの採取方法は 1.1.2.、1.2. と同じである。

授業・・・・・・・・小学校音楽科の教育法の授業。5 回目（1.2. の次の時間）。

対象・・・・・・・・小学校音楽科の教育法の授業を必修として履修しているM大学の学生 28 名（1.1.2.、1.2. の授業と同じ対象）。

教材・・・・・・・・『知ってるつもり』のフジコを取り上げた回の一部。約 35 分。

教材について・・・・・・・・様々な人物を取り上げ、生涯を事実即した形のエピソードで綴っていくトーク番組。フジコを取り上げた回を抽出した。今回は生涯の他に天才との絡みで、フジコの音楽の独自性を音響学の立場から考察している。この中で日本音響研究所の所長鈴木松美博士は高圧波形分析の結果、前の余韻を残しながら演奏が進んでいくフジコのピアノを他に例を見ないものとし、これが「揺らぎ」として聞者にリラックスを与えている。また作曲家助川敏弥は、弱い人の心を歌う音楽の必要性を説き、競争しないフジコの音楽がそれにあたるとし、とても心が安まるとしている。

以下学生のアンケートを示すこととしよう。一部（⑬と⑭がそれにあたる）、関連する「小犬のワルツ」のアンケート結果を先に示すこととする。

- ⑬ 2 曲とも、同じ曲なのに弾いている人が違うだけで雰囲気全然違うように感じた。テンポが違ったり、なめらかさが違うように聴こえた。ソフロニツキーさんのより、ふじこ（原文のまま）さんの方が、曲がはっきりしていて、なめらかさがあって、聴いていて楽しかったし、心地良かった。

- ⑭ ソフロニツキーさんの方は強弱がとてはっきりしていて、曲にすごくスピード感があるように感じた。また一音一音しっかりしていた。フジコさんの方は全体的にふわっとしたような、ちょっとゆったりしたような曲のように感じた。ソフロニツキーさんより聴いていて心地がよかった。
- ⑮ フジコさんは自分自身つらい体験をしているので、つらい思いをしている人の気持ちがわかるのかなと思った。
- ⑯ ビデオの中で誰かが言っていたように、フジコさんのピアノは誰かと競争してるんじゃなく（原文のまま）、ただ自分が弾きたいから弾く、という言葉を引きいて、確かにそうだなと思った。誰かに必要とされている、と実感できたときの喜びは大きかったと思う。
- ⑰ フジコのすごい人生の中で、人間的に強く成長したことが今のピアノにもつながっていると思いました。ピアノは自分を表現するための道具であって、その道具を使って、何を表現するのが大切だと思います。フジコはそのピアノで表現するものがとても大きく、すごいものなのだと思います。人のことを思いやれるのは、傷ついたことがあるからこそだと感じました。自分が傷ついたらそれだけ相手の傷ついた気持ちが分かると思うから、フジコのピアノにはいやされるのではないかと思います。
- ⑱ フジコさんにしかわからない思いがあって、その思いが人々の心をいやしているのだと思いました。フジコさんは決して「人々の心の傷をいやそう！！」と思ってピアノをひいているわけではないと思います。心のままを、音楽をうたっている（原文のまま）のだと思います。真の音楽療法とは、そういうものなのではないか、と感じました。

音響学的な考え方をすれば、フジコの音楽には「揺らぎ」等の特徴があり、リラックスできるのかもしれない。しかしアンケートの結果からもわかるとおり、学生たちはフジコの人生＝フジコの音楽として鑑賞をしているのがわかる。逆境を受け容れるフジコの生き方、つらさも音楽に昇華する生き方が、同じように苦しんでいる人たちの心のなかに、いわば愛という「共同感情」<sup>16)</sup>を引きおこしていき、これを通して音楽療法につながっていくようである。

メッセージ性の観点から言えば、学生アンケートの⑰「ピアノは自分を表現するための道具であって、その道具を使って、何を表現するのが大切だと思います。」に示されるように、ピアノはフジコにとって自分というものを表現する手段であり、聞き手にはそのフジコ自身がいかなるものかということが重要になってくる。ここでは結果としてフジコの表現する「愛」というメッセージが提示されると筆者は考える。また、学生アンケートの⑱「フジコさんにしかわからない思いがあって、その思いが人々の心をいやしているのだと思いました。」に示されるように、フジコの思いがピアノを通してメッセージとなって聞き手に対して癒しや安心感を与えているのである。その際、学生アンケート⑱「フジコさんは決して『人々の心の傷をいやそう！！』と思ってピアノをひいているわけではないと思いました。心のままを、音楽をうたっている（原文のまま）のだと思います。真の音楽療法とは、そういうものなのではないか、と感じました。」に示されるように、メッセージは決して強制的ではなく自然発生的なものであるといえよう。

今回は、学生が人生、教育について取り上げるなど、フジコシリーズ（筆者が授業中命名した）の最後を語るにふさわしい内容をもったアンケートが多かった。



### 3. むすびにかえて

すべてを示すことはできないが、学生のアンケートから様々な視点を得ることができる。その中で特徴的なものとして、フジコの生涯学習の視点がある。本論文では、「制度や法律レベルでの人々の音楽学習の支援・促進とともに、音楽学習者の生涯のわたる音楽的成長に関する諸側面・諸要素からの検討も重要である」<sup>17)</sup>という指摘の重要性に鑑みて、生涯学習を「個々人が自主的主体的に生涯にわたって学習すること」と仮に定義することとする。

このことについては、多くの苦難を乗り越えたことが糧になっている、等々といったアンケートに見られる学生の意見はまさにそうであるし、1.1.2.の画面全体に広がるフジコの生活そのものがどこをとっても、「生涯にわたってピアノを学んでいくという形」での生涯学習そのものであった。生涯学習の視点については、多くの学生がアンケートの中で指摘していた。

フジコというピアニストはクラシック界にあって、ある意味異例のピアニストである。フジコ自身が言っているように<sup>1)</sup>、彼女はどこにも属さない。フジコはフジコであってフジコ以外の何物でもないのである。

またいみじくも留学先のベルリン音楽大学名誉教授ヘルムート・ロロフが、「フジコの場合 ショパンやバッハ何を弾いても フジコのピアノだった」と言っているように<sup>15)</sup>、ある意味、21世紀の音楽家、作曲家、表現者としての存在、フジコという、稀有なあり方が確認される。

「音楽を来させてあげなければいけない」とは、筆者が師事したヴァムザー教授<sup>18)</sup>の言であるが、ショパンをショパンとして再表現する、モーツァルトをモーツァルトとして再表現するといった、器としての従来の表現のあり方を覆し、あくまで自分が主になって音楽を作り上げていくといったフジコの姿は、受動的に終わりがちな鑑賞の授業にあってこそその真価を発揮すると考える。

筆者は、こういったフジコのクラシックでありながらも、クラシックでない、古典派、ロマン派といった音楽史的な枠にとらわれず、常に現代を生きるフジコの作り出す音楽としての存在に着目する者である。こういったありかたは、「民族音楽とクラシックの間に位置する（民衆の支持をバックに花開く……筆者加筆）……民衆音楽あるいは大衆音楽」<sup>19)</sup>、すなわち現代のポピュラー音楽の存在にも通じるのではないかと考えている。

筆者は、歌唱をその題材にしているが、その存在意義として共通的な基盤を持つ可能性を、奥の言う「ポピュラー音楽へのもう一つのアプローチ——ドイツ・バイエルン州の音楽教科書『MUSIKLAND』の『音楽は挑戦する』が開く地平——」<sup>20)</sup>に見る。

奥は、学習目標を「生徒は、社会的な弊害や定着した聴取習慣に対し、挑発する音楽の実例を音楽の様々な分野から学び知る。音楽と言語による表現手段について実際の、理論的な取り組みを集中して行うことにより、彼らは挑発効果の方法を探り、考え方の衝突を利用してプラスの変化を引き起こす可能性について考えることになる。」<sup>21)</sup>と引用している。

元来は歌による挑発であり、こういった視点をそのまま導入するのは難しいとするのが一般的かもしれない。しかし筆者はクラシックであり、なおかつ歌でなくとも、ある意味ポピュラーにリンクする音楽を、マンネリに陥りがちな鑑賞の授業成立の、挑発的な思想的基盤としてとり入れる可能性があるのではないか。その音楽に内在する、本来ならば存在する可能性の低い対立的ともいえる要素に着目し、あえて学生たちに潜在する「共同感情」——この場合は同時代性への感慨ともとらえられよう——を刺激すること

も、学びが成立する一つの方法といえよう。このことは2. 音楽療法の視点についてメッセージ性を中心に一で取り上げた、フジコの音楽の持つ独自性とされる「揺らぎ」の持つ聞き手に与える普遍的な心地よさとも同時に働くものであると考えている。

筆者は、様々な教材、様々な音楽のあり方を認める鑑賞の授業の可能性を模索したいと思うのである。

以上、アンケートからは教師と学生、もしくは学生同士による意見交換の結果もうかがわれ、様々な学びの姿が顕現された。筆者はこういった点に関して、音楽教育を専攻していない、特にクラシックの領域の音楽に接することの少ない学生のためには、フジコの持つ音楽力、メッセージ性は十分にインパクトを与えることができ、学生自身が音楽に対して言語活動をすることでより深い教育力を発揮することがわかると考えている。

こういった一連の言語活動が、以前より言及されていた「音楽の持つ感動の力（ショーペンハウアーの音楽論）」<sup>22)</sup>により深く関わってくるのであり、小学校音楽科の最高の上位概念である「豊かな情操」へとつながっていくであろう。

筆者は、小学生に言語活動の充実を説く前に、まず学生自らがこういった言語活動を通じて、音楽のよさを体感することが必要になると考えている。

また学生の声そのものを示したことからわかるように、言語活動に関しては音楽科の授業とはいえ、国語力など、思考力を高め深めるために、他教科の学力とのさらなる連関が望まれる。それらとの相乗効果が音楽科における学びを創造すると考える。

今回総花的に取り扱った音楽療法、生涯学習の視点に関しては、さらに深く追求したいと考えている。なお学生のアンケート結果に関しては、授業改善のため、あらためて検討を加えることとする。

## 註

1) フジコ・ヘミング (2000) 『フジコ～あるピアニストの軌跡～』, ビクターエンタテインメント株式会社, VIBC-1.

2) 東京音楽学校 (現・東京芸術大学) 出身のピアニストである母と、ロシア系スウェーデン人の画家、建築家の父のもとにベルリンで生まれる。

5歳の時、日本に帰国。10歳でレオニード・クロイツァーに師事。青山学院高等部在学中の17歳の時にコンサートデビューを果たす。東京芸大を経てNHK毎日コンクール音楽賞入賞、文化放送音楽賞等受賞。

渡辺暁雄指揮による日本フィル等と共演、来日中のサムソン・フランソワに絶賛される。

その後30歳でドイツへ留学。ベルリン国立音楽学校を優秀な成績で卒業し、ウィーンのパウル・パドラス・スコダに師事。

今世紀最大の作曲家・指揮者の一人といわれる、ブルーノ・マデルナに才能を認められ、彼のソリストとして契約する。また、その才能に注目したレナード・バーンスタインが彼女を支持。

しかし、ウィーンのリサイタル直前に耳の聴力を失うというアクシデントに遭遇、この時はすべてのコンサートをキャンセルした。

その後、ストックホルムにおいて耳の治療に専念する傍ら、音楽学校の教師の資格を得、以後はピアノ

教師を続けながら演奏活動をおこなう。

1995年、日本に帰国。母校・東京芸大、旧奏楽堂で数回にわたるリサイタルを行い、大反響を呼んだ。1999年8月、デビューCD、「奇蹟のカンパネラ」がリリース。同CDは日本ゴールドディスク大賞を受賞した。

今年（この引用における今年とは2000年をさす……このカッコ内筆者による）から来年にかけて、日本各地でのコンサート、NYシンフォニックとの共演、ヨーロッパ演奏旅行、またNYカーネギーホールでの演奏会が予定されている。（フジコ・ヘミング [2003] 『フジコ・ヘミング魂のピアニスト』、求龍堂、最終頁。）

- 3) 文部科学省 (2008) 『小学校学習指導要領解説 音楽編』, 教育芸術社, p.6.
- 4) 文部科学省, 同上書, p.4.
- 5) 文部科学省, 同上書, p.89.
- 6) ウラジーミル・ソフロニツキー (2005) 『伝説のショパン没後 100 年記念リサイタル』, コロムビアミュージックエンタテイメント株式会社, COCQ83968・9.
- 7) フジコ・ヘミング (2003) 『トロイメライ』, ビクターエンタテイメント株式会社, UCCD-1080.
- 8) 同上 CD の解説, p.4.
- 9) 6) CD の解説, pp.6~7.
- 10) フジコ・ヘミング (2003) 『雨だれ』, ビクターエンタテイメント株式会社, UCCD-1100.
- 11) レオニード・クロイツァー (2003) 『【ピアノ講座より】』, Green Door, GD-2005~8.
- 12) クロイツァー豊子 (2003) 『ショパンリサイタルⅡ』, コンサート録音, GD-2005~8.
- 13) レオニード・クロイツァー (1989) 『ある音楽家の美学的告白』, 音楽之友社, pp.75~76.
- 14) 音楽教育学会編 (2004) 『日本音楽教育事典』, 山口勝弘 p.196. を参照。
- 15) 日本テレビで 2000 年 9 月 17 日に放映された番組。
- 16) この感情に関しては、F. フレーベルの遊戯等の中で母子の間、遊具との間等に見られるとされる。（拙稿 [1990] 「F. フレーベルの恩物にみられる教育思想—第二恩物を中心にして—」『西洋教育史研究』第 19 号 [筑波大学外国教育史研究室], p.61.）
- 17) 音楽教育学会編 (2004) 『日本音楽教育事典』, 丸林実千代 p.453. を参照。
- 18) ウィーンのラヨス・サモシ教授の直弟子。声帯障害を治療することができる（若い世代のためのヨーロッパ文化運動 [E.K.F.D.J.G.] の議長ユッタ・ウンカルト・ザイフェルトの証明書より）。筆者は、2004 年、2005 年、2006 年の 3 回、クロイツァー・涼子（レオニード・クロイツァーの姪、声楽家）の招きで来日したヴァムザーのゼミナールを受講し、2005 年にはディプロマを取得した。
- 19) 三井徹, 下中弘編集兼発行人 (1981) 『音楽大事典』第 5 巻, 三省堂, p.2356.
- 20) 奥忍 (2007), 「ポピュラー音楽へのもう一つのアプローチ——ドイツ・バイエルン州の音楽教科書『MUSIKLAND』の『音楽は挑戦する』が開く地平——」, 『音楽教育実践ジャーナル』vol.5 no.1, 『日本音楽教育学会紀要』, pp.91~102.
- 21) 奥同上書 p.92.
- 22) 吉永誠吾 (1999) 「音楽鑑賞教室の軌跡」, 浜野政雄監修東京芸術大学音楽教育研究室創設周年記念

論文集編集委員会編『音楽教育の研究 理論と実践の統一をめざして』, 音楽之友社, pp.423 ~ 424.  
吉永はショーペンハウアーの『音楽はまことに偉大なまた並外れたすばらしい芸術であり、人間のいちばん奥深いところにきわめて力強く働きかけてくる』という言葉引用し、音楽がどれほど大きな感動をあたえるかということについて述べている。